とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都豊島区
園名	アスク池袋本町保育園

１．活動のテーマ

<テーマ>

～えいごのなきごえは～

<テーマの設定理由>

動物の声は身近で感じやすく、幼児クラスを通してどのクラスでも興味や関心が広がっていくと感じたため

２．活動スケジュール

11 月から３月まで行い、月に 1 回ネイティブの講師を招致し他国の文化に直接触れる機会を創出することで深く探究活動ができるようにした。その時点での子どもたちの興味関心をもとに問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにした。

１１月：日本語と英語での動物の名前や鳴き声を探究する
１２月：日本語と英語での動物の名前や鳴き声を探究する（動物の数を増やす）
　１月：動物の特徴を探究し、絵や言葉にして表現していく
　２月：日本語と英語での鳴き声や言葉の違いについて探求するなかで、様々な世界に視野を広げ、言葉の違いや鳴き声の違いに気付く
　３月：今までの探求してきたことを共有しあい、更なる気づきや興味を深めていく

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

動物英語絵本・・・実際に調べたり、音を聞いたり調べるために使用
国旗かるた・・・動物の鳴き声にとどまらず様々な国へも興味を広げ、その国の場所や形、国旗や言葉の違いにも気付けるために使用
動物絵カード・・・動物への興味を高め、日頃から手に取り自分なりに考えたり発音しようとする意欲を引き出すために使用
世界地図ポスター・・・動物の鳴き声にとどまらず様々な国へも興味を広げ、その国の場所や形、国旗や言葉の違いにも気付けるために使用
iPad・・・実際に調べたり、音を聞いたり調べるために使用
ホワイトボード・・・調べたことを書きだしたり記録したりするために使用

４．探究活動の実践

【3 歳児実施分】

問いを考える： 音源の聴き比べや絵カードを用いながら、動物の日本語と英語での鳴き声の違いを学んでいく。まずは日本語での鳴き声をさらい、その対比をしていく中で発音が日本語に似ているものから全く違うものまであることを知る。写し絵やお絵描きをして様々な動物がいることを楽しんだり、輪になり回ってきたカードの動物の鳴き声を皆の前で発表したりと、鳴き声だけでなく簡単なゲームを組み込むことによって活動の幅が広がるようにした。

探究活動の様子： 初めは日本語が先行していたが、だんだんと英語での鳴き声を覚えていくにつれ、楽しみながら取り組む姿がみられた。ただ覚えるだけでなく、壁に絵カードを貼り、保育者が言った英語の鳴き声に該当する動物カードを当てるゲームや、輪になり絵カードを順にまわして音楽をかけ、音楽が止まったところでカードを持っていた子どもが鳴き声を発表したり、日本語チームと英語チームに分かれ、鳴き声を発表したりとゲーム性をもたせることでより楽しんで取り組むことができていた。動物の数が増えていくと、集中力が途切れがちになり、落ち着きのなさが目立った。繰り返し、すきま時間に復習することでだんだんと知識として定着していく様子があった。最終段階に入ると、自分たちの知っている昆虫や魚などにも鳴き声があるのではないかと興味を広げ、保育者と一緒に調べることを楽しんでいた。また、日本語での鳴き声に近い英語であると、「似ているね」と気付きがあったり、鳴き声がない動物もいることも新たな発見となった。

ふりかえり（保育士の気づき）：英語をテーマにした保育者主導の活動はしたことがなかったが、鳴き声を聞いたり調べたりする中で英語に関心をもち、発音・記憶することを楽しむ姿の変化が印象的であった。途中、新たに動物の数が増えていくことで集中力が途切れ、落ち着かない様子もあったが、すきま時間に少しずつ復習をしたり、ゲーム性をもたせることによって楽しく探究することができた。10 ほどの動物の鳴き声を覚えた経験は自分たちの自信に繋がっており、「わかる」楽しさから「知りたい」気持ちがわいてくる子どもたちの姿は最終段階の意欲的な姿勢に結びついていた。動物だけでなく、自分たちの知っている魚や昆虫にも鳴き声があるのかどうかに関心を寄せ、クワガタ、シャチ、ペンギン、ラクダ、クマ、など様々な動物の名を挙げる姿があった。すくわく終わるの寂しいと口にする子どもが多く、楽しみながら取り組めていたことが感じられた。

【4 歳児実施分】

問いを考える： 動物の鳴き声について調べていく中で自分たちでも色々な動物を調べたいと興味が出てきていた。また、動物の鳴き声だけではなく日本語での動物の鳴き声を問いかけ親しみやすいよう促していった。鳴き声だけではなく動物そのものにも着目し、動物に因んだクイズを各グループごとに取り組むなど展開させていった。

探究活動の様子： 初めは犬や猫などの動物の鳴き声について講師から英語での鳴き声を教えてもらう。
身近な動物という事もあり子どもたちも馴染みやすさを感じていた様子であった。
中には馬やかえる等、聞きなれないものもあったが繰り返し行っていく中で覚えロ々に言う姿が見られた。
その覚えた動物を用いてグループごとにクイズを行う。「足が速い」や「毛の色は白色」「好きな食べ物はにんじん」「牧場にいる」など具体的なワードを３つ以上出すようにすると、グループごとに話し合いクイズの趣旨を理解し取り組む事が出来ていた。その後は講師の指導のもと、自分で選んだ動物のスケッチを行い、「なぜぞの動物を選んだのか？」「なぜその色を使ったのか」などを全体の前で発表をした。「色が綺麗だから」「かわいくて好きだから」「かっこいいから」「緑色が好きだから」など様々な理由があった。「かわいい」だけでなく「cute」など講師と共に日本語に加えて英語でも言葉を言ったりもした。鳴き声だけではなく絵で表現をしたりと楽しみながら展開をさせていくことが出来た。また、講師に教えてもらうばかりではなく ipad と音の鳴る絵本を使って自分たち自身でも気になる動物の鳴き声をグループごとに３つずつ調べ講師に報告をした。全てに鳴き声があるわけではなくジェスチャーであったり鳴き声がないものもあるのだという事に驚いたり興味を持つ様子が見られていた。最後には習った動物の絵カードを用いて子どもたちが円を作り音に合わせて絵カードの周りを周り音が止まった際の絵カードの鳴き声を言うという椅子取りゲームのような活動を楽しみながらしっかりと鳴き声を言うことが出来ていた。

ふりかえり（保育士の気づき）： 子どもだけではなく大人でも知らない動物の鳴き声があったことは驚きであった。
鳴き声が日本語と同じものもあれば違うもの、鳴き声がないもの、鳴き声はないがジェスチャーで表現することが出来るものがあることは発見であった。
馴染みのないものもあったが、繰り返し取り組んでいく中でしっかりと覚え言う姿に成長を感じた。

【5 歳児実施分】

問いを考える： 音楽絵本の創作に至るまでには身近にある音に気付き、関心を深められるような問いかけや活動を行った。活動を進めていく中では物語の情景や登場人物の心情に合った音とはどのような音かを問いかけ、グループごとに考えられるようにした。

探究活動の様子： 初回の活動では音楽を聞き、そこから連想される情景を自由に絵に描き表現した。互いの発表を聞く中で、様々な発想があることに気付き、初回から友だちの表現を受け止め、共感しようとする様子があった。
音楽絵本に親しむ機会が少ない子どもたちからは「音が付いていることで場面の雰囲気がよく伝わる」「絵本に引き込まれる」といった感想が多く聞かれた。
これまで触れる機会の少なかった楽器の音を鳴らしてみたり、園庭で音探しをしたりする活動を重ねていく中で、日常生活でも「この音は〇〇が～している音みたいだね」と気付いたり、気付きをメモに残したりと身近にある音への関心の深まりがみられ始めた。
題材となった『ブレーメンの音楽隊』は昨年度の生活発表会で劇あそびをしたこともあり、物語の内容や流れをよく理解しながら音楽絵本の創作を進められていた。
普段のおんがくの活動で学んだ「長調は明るい音」「短調は暗い音」といった知識を生かすグループや劇あそびのときに使った効果音や演出を思い出しながら情景に合った効果音を考えてみるグループ等、どのグループもこれまでの保育園生活の中で得た情報をもとに考え、グループでの活動に取り組む姿がみられた。

ふりかえり（保育士の気づき）： はじめのうちは、保育室内の環境の中から音を探すとなると玩具を容器に入れて振った音や玩具を叩いてなる音等、他のグループの様子を真似てみることが多く、音のバリエーションが広がらずにいた。活動範囲を保育室以外にも広げたり、保育者側から音の提案をしたりする中で、子どもたちの発想も膨らみ、様々な音に目を向けることができていた。

★写真添付（3 歳児）

①しまと→くーくー
②からす→かーかー
③ふくろう→ふーとう
④おおかみ→うぉー
⑤さる→すくりーち
⑥へび→ひゅ
⑦らいおん→ろぁ
⑧ごりら→うーう
⑨ひよこ→ぴよぴよ
⑩ぞう→ぱおーん
ぺんぎん
くじら
くわがた
しゃち
いのしし
らくだ
とんび

★写真添付（4 歳児）

★写真添付（5 歳児）

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都豊島区
園名	アスク池袋本町保育園

1．活動のテーマ

<テーマ>

～音楽絵本を創ろう～

<テーマの設定理由>

考える力を培っている。その中で能動的に感じたことを表現して伝えていく経験をさらに伸ばしていいと感じている

2．活動スケジュール

11 月から３月まで行い、月に 1 回音楽の講師を招致し楽器の演奏や歌声など本物に触れる機会を創出した。また、その時点での子どもたちの興味関心をもとに、保育士と音楽講師と共に問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにする

１１月：聴こえてくる音の背景や雰囲気を描いて表現したり、イメージを共有していく
１２月：物語の情景や登場人物の気持ちなどを探究していくなかで感じた事とを音にして表現していく
１月：物語の情景や背景にあう効果音を探究し、音楽絵本を創りあげる
２月：物語の情景や背景にあう効果音を探究し、音楽絵本を創りあげる
３月：今までの探求してきたことを共有しあい、更なる気づきや興味を深めていく

3．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・絵本（ブレーメンの音楽隊、三匹のこぶた、クレヨンのくろくん）
音楽絵本作りの題材に使用し、読み聞かせを重ねる毎に興味を持ちイメージを膨らませるために使用
・楽器（ヴィブラスラップ、レインスティック、鉄琴、木琴、太鼓、鈴、タンバリン、カスタネット）
音のイメージを考え、楽器を使い音の奏で方や効果音の探究をする
・文房具（模造紙、クレヨン、色鉛筆）
音を聴き、感じ取ったものを描いたり言葉にして表現する

４．探究活動の実践

【3 歳児実施分】

問いを考える： 身の回りの様々な「音」に関心を持つところから、教材シート（おとのなる木）をもとに、「ポジティブな感情音（嬉しい・楽しい気持ち等）→赤」と「ネガティブな感情音（悲しい・怖い気持ち等）→青」に分類しながら音探しを楽しんだ。それぞれが感じとる気持ちに正解も不正解もなく、僕はこう思う、私はこう感じると違いを認め合いながら音探しやその種類分けを楽しめるようにした。

探究活動の様子： 音が様々な感情に分類できるということに気付き、身の回りのものだけでなく、園内を探検したり、様々な楽器を鳴らしたりして音に触れる経験を重ねていった。園内探検で、乳児クラスの部屋から玩具を出す音が聞こえてきた時、「あ、おもちゃを出す音がする！おもちゃの音は楽しい音だね」とすぐに反応が返ってきた。水道から水を流し、どんな風に感じるか問いかけると、ある子は「こわい音だ。だって出しっぱなしにしてたらもったいないばあさんが来ちゃう」と発言し、またある子は「手をきれいにするから嬉しい音だと思う」などとそれぞれが感じたことを発表し、楽しむ姿があった。楽器に触れ、様々な音があることを知ったとき、その楽器の音からも「赤だ」「青かも」とイメージを感じ取っていた。

３匹のこぶたが音楽絵本の題材に決まり、わら・木・レンガの場面の音探しをすると、これまでの探究活動が成果をみせた。木の家はすぐにイメージしやすいこともあり、木製の玩具をトンカチで打つことで表現する子どもが多かった。わらの家に関しては、普段目にするものでないことからイメージがつかないだろうと予想していたのだが、絵本のイラストから「わらって草みたいなのでしょ？」と考えることができていた。どうしたら草の音を表現できるか考えると、「葉っぱを使ったらいいんじゃない？」と、保育室内の観葉植物を使うことを提案する子がいた。また、机や床、壁をこすっても同じような音が出ることに気がついた。レンガの家に関しては、レンガというものを知るところから、タブレットを使ってレンガ職人の動画を見た。家を作るためにはレンガを積み重ねるだけではなくセメントが必要だということも知り、音探しの幅の広がりへと繋がった。楽器に触れていく中で、鳴らし方によっても受ける印象が変わることにも気付いた。おおかみの出てくる場面では、こぶたを追いかける切迫感を小太鼓を速く鳴らすことで表現できることもわかった。探究活動を楽しみすすめる中で、自然と３匹のこぶたの絵本を好んで読む姿や、積み木でレンガや木の家を作って遊ぶ姿が増えていった。

それぞれの家のグループ分けをし、自分の担当する楽器や植物、玩具を決める中でも、ちゃんとわらの音が表現できている、これも近しい音だ、と一人ひとりが納得しながら決めていく姿があった。１２月に発表会があったこともあり、役になりきる楽しさや、絵本の文面には描かれない「もしかしたらこうだったかもしれない」という想像上のストーリーも考え、効果音をつけ、楽しむ姿もあった。おおかみをやっつけた結末には、発表会で演じた３匹のヤギとトロルのエンディング曲を用いて替え歌を作る展開にも広がった。

ふりかえり（保育士の気づき）： すくわくプログラムを始める前と後では子どもたちの興味・想像・集中力に違いが現れていると感じた。初めは音探しに興味のなかった子が、自分で見つけた音を鳴らす楽しさを味わったり、絵本のお話には描かれない場面を想像して考えてみたり、次はどんな話を先生が展開するのだろうと注意して聞くようになったり、感覚のアンテナが増えたイメージである。活動時期も発表会後であったため、役になりきることやイメージをもつことの楽しさをより感じることができていた。一人ひとりの中で感じた感覚が答えであり、正解のない自由な表現あそびとして無理なく進めることができたと感じる。

【4 歳児実施分】

問いを考える： 音を聞き「楽しい音なのか」「悲しい音なのか」「どんな感じがするか？」と子どもに問いかけていった。また、言葉だけではなくその感じを絵で表現するという抽象的なことも取り組んでいった。そのように感性を養っていく中で音楽絵本作りに取り組み場面ごとに「登場人物がどんな表情をしているのか」「この時はどんな感じなのか」歌っているシーンは「何を使ったら歌っている感じになるのか」などと具体的に問いかけ、１ページずつ物語を考えていった。

探究活動の様子： ２つの音を聞き１つ目は「悲しい感じがする」「雨が降っているようだ」「静かな音だから夜なのかな？」と話す。もう一つは「お化けが出てきそう」「建物が崩れていくみたい」などと口にしていた。発表会が近かったこともあり劇で使用する音でも同様のことを行い絵で表現をした。すると明るい音がする絵は暖色が多く、暗い音怖い感じがする音は黒や紫緑などの暗い色味を使う子がほとんどであった。
その過程を踏まえグループに分かれながらブレーメンのおんがくたいの音楽絵本作りに取り組む。登場シーンはどの動物も悲しい表情をしていることから小さな音を鳴らしていた。泥棒を驚かすシーンでは大きな音を出すには何がいいか問いかけると楽器の名前が出てきたため、園にある楽器をいくつか鳴らし小太鼓・鳴子・ハンドベルなどに決定をする。最後の動物が歌っているシーンでも楽器を使いたいとの声から鉄琴・ビブラステップ・トライアングル・レインスティック・鈴・ハンドベルなどに決定した。「このお話は悲しい気持ちから明るくなる感じだよね」との声から“あしたははれる”の歌が良いのではないかとなった。
最終的に講師が読む絵本に合わせてグループごとに音を付け音楽絵本が完成した。

ふりかえり（保育士の気づき）： 絵で音を表現する際に明るい音は暖色、暗い音は暗い色で表現をする姿に子どもたち自身の中でイメージがしっかりとあることは発見であった。そして、表現をした際には同じ音を聞いても「お化けの音に聞こえる」「竜巻の音に聞こえる」「建物が崩れる音に聞こえる」といったように一人ひとり感じ方が様々であり、また、抽象的なものを表現する力にも驚いた。

【5 歳児実施分】

問いを考える： 音楽絵本の創作に至るまでには身近にある音に気付き、関心を深められるような問いかけや活動を行った。活動を進めていく中では物語の情景や登場人物の心情に合った音とはどのような音かを問いかけ、グループごとに考えられるようにした。

探究活動の様子： 初回の活動では音楽を聞き、そこから連想される情景を自由に絵に描き表現した。互いの発表を聞く中で、様々な発想があることに気付き、初回から友だちの表現を受け止め、共感しようとする様子があった。
音楽絵本に親しむ機会が少ない子どもたちからは「音が付いていることで場面の雰囲気がよく伝わる」「絵本に引き込まれる」といった感想が多く聞かれた。
これまで触れる機会の少なかった楽器の音を鳴らしてみたり、園庭で音探しをしたりする活動を重ねていく中で、日常生活でも「この音は〇〇が～している音みたいだね」と気付いたり、気付きをメモに残したりと身近にある音への関心の深まりがみられ始めた。
題材となった『ブレーメンの音楽隊』は昨年度の生活発表会で劇あそびをしたこともあり、物語の内容や流れをよく理解しながら音楽絵本の創作を進められていた。
普段のおんがくの活動で学んだ「長調は明るい音」「短調は暗い音」といった知識を生かすグループや劇あそびのときに使った効果音や演出を思い出しながら情景に合った効果音を考えてみるグループ等、どのグループもこれまでの保育園生活の中で得た情報をもとに考え、グループでの活動に取り組む姿がみられた。

ふりかえり（保育士の気づき）：はじめのうちは、保育室内の環境の中から音を探すとなると玩具を容器に入れて振った音や玩具を叩いてなる音等、他のグループの様子を真似てみることが多く、音のバリエーションが広がらずにいた。活動範囲を保育室以外にも広げたり、保育者側から音の提案をしたりする中で、子どもたちの発想も膨らみ、様々な音に目を向けることができていた。

★写真添付（3 歳児）

★写真添付（４歳児）

★写真添付（５歳児）

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都豊島区
園名	アスク池袋本町保育園

１．活動のテーマ

<テーマ>

～きみの「できる！」をさがそう～

<テーマの設定理由>

得意なことを見つけたり自信をつけたり、新しいことへの挑戦につなげてきたいため

２．活動スケジュール

11 月から３月まで行い、月に 1 回体操の講師を招致し身体の動かし方についてこどもたちの前で実演をしたり、探究心を書き立てるような助言をもらった。また、その時点での子どもたちの興味関心をもとに、保育士と体操講師と共に問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにする

１１月：様々な運動あそびを通して得意不得意を探究していくなかで、自分の体に興味と関心を持つ
１２月：ジャンプ力、走力、押す、引く力、柔軟性、バランス能力の中で自己分析をしながら体の仕組みやつかいかたを探究する
１月：遊びの中でも身につく体の動きや記録を伸ばすのに有効な運動を考え、実践する
２月：記録の変化に気付き、得意不得意の更なる探究と共に様々な事へ挑戦をしていく
３月：今まで探究してきたことを共有しあい、更なる聞く気や興味を深めていく

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

エアクッション・・・自分の体について興味を持ち、自分の得意分野を見つけていく中で友だちと一緒に楽しめる遊びを考える為に使用
アーチ・・・自分の体について興味を持ち、自分の得意分野を見つけていく中で友だちと一緒に楽しめる遊びを考える為に使用
マーカーコーン・・・自分の体について興味を持ち、自分の得意分野を見つけていく中で友だちと一緒に楽しめる遊びを考える為に使用
万歩計・・・自分の体について興味を持ち、自分の得意分野を見つけていく中で友だちと一緒に楽しめる遊びを考える為に使用
縄・・・自分の体について興味を持ち、自分の得意分野を見つけていく中で友だちと一緒に楽しめる遊びを考える為に使用
鉄棒・・・自分の体について興味を持ち、自分の得意分野を見つけていく中で友だちと一緒に楽しめる遊びを考える為に使用

記録用紙・・・ジャンプ力　走力　押す、引く力、柔軟性、バランス能力などの体力テストをし、数値ではなく得意不得意を自己分析、評価し自分の得意分野を生かしたスポーツやあそびは何かを見つけ、不得意なものを克服するにはどうしたらいいかを考える

４．探究活動の実践

【3 歳児実施分】

問いを考える： 様々な運動遊びを実践し、自分のできそうなこと、楽しいと思うこと、もっとやってみたいと思うものを絞っていった。自分の得意を見つけることで楽しいと思える時間が増えることに繋がったり、好きなことを伸ばしていく過程でもっと他にもできることを増やしたいという挑戦心に繋げたり、今できること、今好きだと思えることをスタート時の目標として決めるようにした。

探究活動の様子： １回目の実施では「ジャンプ」「走る」・２回目の実施では「ジャンプ」「走る」「バランス」グループに分かれた。普段よりトランポリン、マラソン・鬼ごっこをしていたことにより、ジャンプ・走るを頑張りたいと決めた子どもが多かった。初回の計測では記録というものを特に気にする様子はなく、臨んでいた。その後、各グループで「（遠くへ）ジャンプ」「（速く）走る」ためにはどんなところを意識して体を動かす必要があるのか、実際に体を動かしてみることで考えられるようにしていった。遠くへ跳ぶためにはひざを曲げた方が良い、腕を振ってジャンプの瞬間前に振り切るなど、実践することで気づきに繋がった。走るに関しても同様に、腕と足を速く動かすこと、つま先で地面を蹴ることでより速く走れることに気がついた。そのような体の動かし方が効果的であると皆で考えた後、結果をより高められるような運動遊びを考えた。遊びを考える・意見を出すという難しさはあったものの、遊びが決まってしまえば一生懸命に取り組む姿がみられた。

２回目の計測では若干、前回の記録を更新したいと意気込む子が増えた。２チーム目の頑張りたいこととして、前回と同じ目標を掲げ、記録を更新したいと考える子と、新しい目標を掲げる子に分かれた。体の使い方を工夫しながら結果を伸ばすための運動遊びに取り組む中で、自由遊びの中でもすくわく活動を再現する子が増えていき、運動遊びの楽しさを実感している様子が感じとれた。最終計測では緊張する様子の子もおり、結果ほとんどの子どもが大幅に記録を伸ばすことができていた。

ふりかえり（保育士の気づき）： ３歳児クラスでは「活動理解」という段階においてグループ活動の難しさが顕著に出ていた。１１月という下期に始まったすくわくプログラムであったが、この時期でもだいぶ難しかったため、楽しく活動を進めていくためには工夫が必要となった。１人ひとりが決めたテーマに対し、１つずつ全体で実践をしてから理解を深め、その後各グループに分かれて取り組む方がうまく進行できた。初回にすぐグループに分かれて話し合う場を設けた時、各グループ、何をすれば良いのかわからずおふざけに発展してしまい、意見出しなど到底難しかった。初めからグループ活動に重きを置くのであればグループの数分職員を配置することである。

回数を重ねる毎に子ども達自身で体の使い方が考えらえるようになり、すくわくの時間以外でも取り組んでいる運動遊びを楽しむ姿が増えていったことは、子どもたちが心から楽しいと感じていることを示していると感じた。記録への反応の変化も初回と最終では顕著であり、自分の力で記録を伸ばせたことに自信を持ち、１つでも楽しいを見つける機会になったのではないかと感じる。

【5 歳児実施分】

問いを考える： 走る・押す・引く・柔軟・跳ぶ・バランスの中から自分の伸ばしたい力を決めてグループに分けをし、その力を伸ばすためにはどのような運動が有効的であるかを考えられるよう問いかけをした。はじめのうちは特に、子どもたち自身が運動とあそびを繋げることに難しさもあったので、あそびを展開できるようグループでの話し合いの進捗状況に応じて保育者や体操講師が間に入り、助言しながら一緒に考えた。

探究活動の様子： 押す力では「机を動かすときに使う力」「手押し相撲をする」、引く力では「友だちの乗ったタイヤを縄で引く」「縄を引きあう」「鉄棒にぶら下がる」、走るでは「投げたボールやフリスビーを走って取りに行く、落としてしまったらその場で１０回足踏みをする」、柔軟では「友だちと手を繋いでストレッチをする」等、日常生活動作と運動を重ね合わせ体を動かしたり、日頃から行っているあそびと自分のグループが担当する伸ばしたい力を関連づけたりと、グループの友だちと意見交換し互いの意見を試す姿がみられた。
活動の 2 回に 1 回ある測定は必ずしも結果が前回を上回るわけではなかったが、だからこそ次回はより結果を伸ばそうという思いを持ち、切り替えながらあそびを考えることができていた。
３回目の活動では前回と同じ分野を選択し更なる向上を目指す児、異なった分野を選択し新たな分野に挑戦する児、様々な姿がみられた。
活動の終盤には戸外での活動も設けたところ、あそびの幅が大きく広がり、ダイナミックな動きを楽しみながら探究活動に取り組んでいた。

ふりかえり（保育士の気づき）： これまで行ったことのない分野の運動を測定することで、自分の可能性に気付く機会となったと同時に記録が伸びることの達成感や自信に大きく繋がり、個々の成長もみられた。
環境構成としては保育室を広げて体を動かすことのできる環境づくりを行ってきたが、室内での活動は限界があった。安全面を考慮するだけでなく、より正確な測定するためにも園庭や公園等屋外での活動が望ましいと考える。そうすることで子どもたちのアイデアの広がりにも繋がり、子どもたちがより楽しみながら活動できるのではないかと感じた。

【4 歳児実施分】

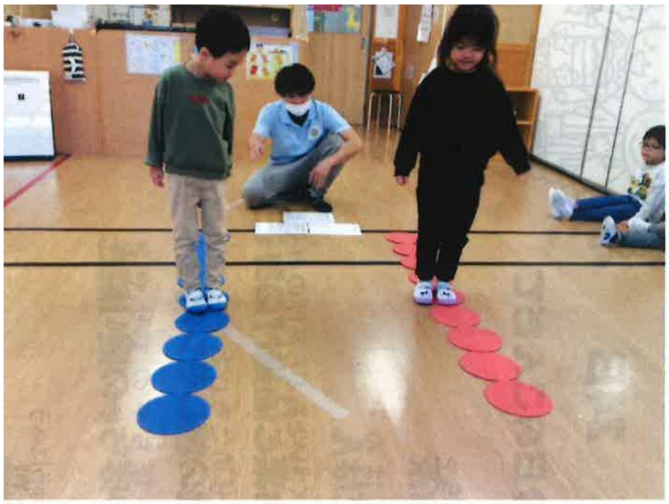
問いを考える： 走る・柔軟・飛ぶ・バランス・引く・押すといった項目をそれぞれ測定し、その中から２回に分け一つ項目を自分で決めて活動に取り組む。グループ活動を主とし、遊びを通してそれぞれのグループに「どのようにしたら伸ばしたい力を伸ばすことができるのか？」と問いかけ、自分たち自身で考えて活動に取り組むようにしていった。また、実際に子どもたちが考えた活動を取り組む中で力が伸びるのかを都度確認をしつつ、活動を展開させていった。

探究活動の様子： 各グループ保育士や講師に援助されながら主体的に遊びを考え取り組んでいた。
１回目の走るグループではリレーや鬼ごっこの様な要素を取り入れ行っていった。バランスグループでは手や足にマットを乗せ片足立ちで落ちないようにする遊びを考案し、繰り返し練習をしていた。引く力グループでは２人一組となり縄を使って一人が引き一人が寝て縄と持つということをした。どのグループも劇的な変化は見られなかったが記録が伸びているグループもあった。
２回目は１回目と同じ項目を選ぶ子もいた。１回目の記録からどのようにしたら記録が伸びやすかったのかをグループごとに話し合い取り組んでいった。引く力ではただ引くのではなく腕の力や腹筋も必要であることバランスや走る力では足の力が必要となる事などに着目し、遊びを考えていった。走る力ではお尻歩き鬼ごっこをし、鬼にタッチをされたらその場で１０秒間足踏みをすることバランスグループは片足を地面から離し、お題の物になりきりながら１０秒以上止まることができるか、引く力ではマットに縄跳びを付け一人がマットに座りもう一人がマットにつけた縄を引っ張るということをした。繰り返し行っていくとどのグループも以前の記録より大幅に記録を更新することができ、考案した遊びが効果的であったことが分かった。

ふりかえり（保育士の気づき）： １回目の記録の結果を基に各グループがどのようのしたらよいのかという点にしっかり着目をし取り組んだことで記録が大幅に更新できたことは驚きであった。それには１回目の経験があったことでより具体的な考えへと繋がることができたのではないだろうかと考えた。また、自分のグループだけではなく他のグループの行っていることに興味を持ち、集団遊びの中で他のグループの活動を実際に行う姿は発見であった。

★活動の様子添付（３歳児）

★活動の様子添付（４歳児）



★活動の様子添付（5 歳児）